

音でみる風景

MESSAGE

新垣 勉

ARAGAKI Tsutomu



東京に来たのは1974年。高校を出て鍼灸師の資格を取って、大学の神学科に入学した時です。東京の空気は違いましたね。それと言葉。お国訛りが違いましたから、とても神経を使いました。私たち視覚障害者は、イタリアに行けばイタリアの風があるように、その土地に行くとその土地の空気を感じ取ります。

ふるさと沖縄の空気には、どこことなく生暖かい風みtainなものがあります。夏の東京は風が抜けるところがなく蒸し暑く、気温も36~37℃にもなりますが、沖縄ではどんなに暑くても32℃以上になることはめったにありません。それは海に囲まれているため風が抜けていくからです。やはり風の音や匂いが違います。だから沖縄に帰ると、ほっとする部分があります。嘉手納基地の飛行機の音はいただけませんが。

沖縄っぽい音はやはり音階ですね。三線や沖縄の民謡は「ドミフセソシ」の5音階。この琉球音階は自分の体の中に染み込んでいます。歌手になった私の原点でもあります。

2010年に歌手生活30周年を迎えました。最初の20年ほどは一人で草の根運動で活動していました。杖と口と信念の三つを持って、どこにでも一人で行きました。見えないがゆえに、いろいろな人と触れ合い、出会う、沢山の話をしました。列車も一人で乗り、東京から鹿児島まで一番安い列車を乗り継いで行ったこともあります。でも今、お国訛りが聞かれなくなり、どこに行っても同じに聞こえ、ちょっと寂しいですね。また、外で遊びまわる子供の声が聞こえなくなったのも寂しいです。

車内では時折、親切に席を譲ってくれる方がいます。その際には、あと一駅で降りる時であっても断らないようにしています。それは、その方も勇気を出して言ってくれた訳ですから、断ってしまったらその場がいやな空気になってしまいます。「与える喜び」と「受ける喜び」の両方の心を持っているのが人間だと思います。それらは子供の頃から教える必要があると思います。家庭の中での幼児教育は大事です。見えないものや、人と人との触れ合いを大切に。大人がそれを教えていくことで将来、自然にそれができる人間になります。「あいさつ」一つとっても、私たちの場合は「言われない」と分かりませんからね。

日本は必要以上にまちなかで音楽を使い過ぎますね。商店街やレストランでも音楽が鳴っています。床屋さんに行っても、テレビなどからいつも音が鳴っているので、疲れてしまいます。私たちにはどうしても聞こえてしまいますから

ね。あれは、音楽であって音楽でない。音楽というのは耳に入ってくるものであってもいいけど、主体的に自分で聴くものだと思います。これらの音楽は不快だとは言いませんが、あまりにも音楽があり過ぎます。イタリアやアメリカに行っても、あんなには流れていません。電車や駅でのアナウンスは助かります。接近音などもビーと鳴るよりは音楽の方がいいですが、必然性がないのはどうかと思います。でも電子音やシンセサイザーの音は個人的にあまり好きではありません。やはり疲れるからです。生の音、生の楽器の音がいいですね。

イタリアなどに行くと分かりますが、レストランなどで音楽は鳴っていません。その代わりに、生演奏をやっています。まちの広場などでもよく生演奏をしています。私はジャズも好きです。イタリアなどは日本の駅前と違って、どこに行っても大きな広場がありますから、演奏場所にはこと欠かないでしょう。

広場では、人々は思い思いに本を読んだり、パニーニ(イタリアンホットサンド)を食べたりしています。あるいはボールで買ったジェラートを食べながら、楽しく話をしています。日本では時間の流れがせわしい気がしますが、そこでは、時間がゆったりと過ぎて行きます。どこか沖縄の空気に似ています。

カレル橋にて(チェコ・プラハ)
【写真:塚本敏行】